琉球大学学術リポジトリ

【《IIOSレクチャーシリーズ2011第4回》報告】島嶼学からみた琉球弧：日本・国際島嶼学発祥の地で考える

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2014-12-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長嶋, 俊介, Nagashima, Shunsuke
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30017

《IIOSレクチャーシリーズ2011第4回》報告

島嶼学からみた琉球弧

—日本・国際島嶼学発祥の地で考える—

長嶋 俊介*

Perspectives of Ryukyu Arc Studies by Nissology

—Thinking at the birthplace of International Small Islands Studies Association and Japan Society for Island Studies—

NAGASHIMA Shunsuke

1．趣旨

2011年10月27日木曜日、琉球大学国際沖縄研究所主催のレクチャーシリーズ第4回として、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの長嶋俊介先生をお迎えして「島嶼学からみた琉球弧 — 日本・国際島嶼学発祥の地で考える —」という講演会を開催した。

今回のレクチャーシリーズは、今年から国際沖縄研究所で5年間のプロジェクトとして行なっている「新しい島嶼学の創造 — 日本と東アジア・オセアニアを結ぶ基点としての琉球弧 —」という研究プロジェクトの活動の一環として開催したものである。

「新しい島嶼学の創造」というのは、「島嶼、島の発展のことを考えていこう」というプロジェクトである。“島”というと、どうしても「小さい」「遠い」「海に囲まれている」「隔絶されている」、語弊はあるが「遅れている」というようなネガティブな印象で捉えられがちである。しかし、これからはそうではなくネガティブな部分をポジティブに転換していき、そのことによって劣位から優位へと変えることはできるのではないか。そこにチャレンジしていこうというのが「新しい島嶼学の創造」プロジェクトの目的である。

沖縄をはじめとする琉球弧は、大陸圏との関係性の中で様々な技術や文化、思想等を取り入れ融合させることによって独自の社会を形成してきた。一方、沖縄からの移民として海外に移住した人々の手によってその文化が伝播し、移

* 鹿児島大学国際島嶼教育センター教授　Professor, Kagoshima University Reseach Center for the Pacific Islands

住先の地域社会に大きな影響を与えてきた。私達は、「多様性」が重視されるべきこの時代だからこそ、様々な歴史や文化に彩られた沖縄の特徴を活かした研究が島嶼圏の発展に貢献できると考えている。

また、沖縄の米軍基地問題を通して極東安全保障のあり方に関する議論も再燃している。沖縄のみならず東アジア・オセアニア島嶼圏の各国・各地域は軍事・外交における大国との関係性に大きく影響されながら現在に至っている。島嶼圏のこのような位置づけを、大国の側からではなく島嶼圏の主体性に重点を置いて検証することによって、新たな国際平和の実現に向けた処方箋を島嶼圏から提案することを目指している。

2．講師紹介

1949年4月に佐渡島・佐和田で生まれる。1973年に京都大学農学部を卒業し、筑波大学では経済学を専攻、経営政策という分野を研究する。研究分野は、島嶼学、太平洋学、生活経営学、それから生活環境学等いろんな分野に広がっている。1982年から2003年まで長く奈良女子大で教員として勤め、2003年10月に鹿児島大学の多島圏研究センターにヘッドハンティングを受ける。多島圏研究センターは、国際島嶼教育研究センターへと名称が変わり、現在はその国際島嶼教育研究センターの教授を勤める。

先生の特徴の一つは、島を巡る自称「アイランドコレクター」であることである。巡った島々の数は、2011年現在にいたって世界3000を越え全島嶼国に及んでいる。これだけ島を巡っている研究者というのは、おそらくは非常に少なく、現場を踏むことによって得られる知見をもとに、沖縄のことにも関心を持っている研究者でもある。

代表的な著作に、『水半球の小さな大地 — 太平洋諸島民の生活経済 —』（同文舘出版、1987年12月）、『 豊かさの生活学～新しいライフスタイルへの発想～』（ＰＨＰ研究所1990年12月）、『島・日本編』（共著、講談社、2004年7月）、『日本一長い村トカラ』（共著、梓書院、2009年7月）、『世界の島大研究』（監修、PHP研究所、2010年7月）などがある。

3．概要

今回は「島嶼学からみた琉球弧 — 日本・国際島嶼学発祥の地で考える —」というタイトルで、①島嶼学とは何か。②島嶼をどのように体系的に捉えるか。③琉球弧を日本列島との関係でどう捉えるか。④東アジアの中に琉球弧はどのように特徴的か。⑤オセアニアとの関係をどうみるか。⑥島嶼学の現状認識とその方法論、特に古典的島嶼学と新しい島嶼学との関係相違と展望。⑦琉球島

嶼学の課題と展望などの内容について考えてみたい。

3-1：日本・国際島嶼学発祥の地

第1回国際島嶼学会が、1994年6月に沖縄で開かれた。この第1回大会は、現在琉球大学副学長をしております大城肇さんと沖縄国際大学の野崎四郎さんが率先諸準備にあたり、現名桜大学理事長嘉数啓さん達がリーダーになって、メルパルク沖縄で行われました。世界中の研究者が集まり大盛況でした。これはもともと、「世界の島々：世界島嶼会議」という集まりを母体にしています。島嶼に強い関心のある地理学・文化人類学等の環太平洋を核とする世界中の研究者達が中心となって、1986年バンクーバー、88年タスマニで開催してきたものを引き続きバハマで1992年に開催した時、沖縄から大代表団を派遣して招致したものです。内定していたが、県肝いりで大量に送り、沖縄セッションまで開いた。一方これとちょうど同一日程にぶちあたったのが、INSULAインシュラー（国際島嶼開発科学協議会）という組織の集まり。これはユネスコMAB（人間と生物圏）計画内にあった「島の生態及びその合理的利用」をテーマにする共同研究を核にしたもので、事務局がそこに設置される。欧州統合の関連で離島域や後背地域を先進地域に組み込んでいくために「島嶼委員会」を設け、振興目的島嶼研究を盛んにしていた流れと合流し国際化したものです。学者と行政と国際機関が一体になって、島の振興とそのための制度環境を作ろうという動きでした。この初回国際会議が、シチリアで同一日程開催。意図的バッティングと疑うほどで、一週間でもずれていたら両方いけるのにと残念でした。その時に、野崎さんや大城さんから、一緒にバハマにと誘われたのですが、既にインシュラーのほうにも日本離島センター・国土庁関係者とで登録してもらっているので、互いに分担して、両方に分かれての参加となった。

その流れにも背景がある。日本で「'89海と島の博覧会・ひろしま」が開催され、その時に世界中の島行政・研究関係リーダーを集めて博覧会主催シンポジウムをしました。11ヶ国1200人参加で国土庁・NIRAもかかわり国際化の流れへの島嶼国日本の関与を意識したものでした。懇意のINSULA事務局長によると、これがインシュラーを作る重要なネットワークに寄与し、組織化に役立ったと、その後何度もあっているのでその時に述懐していました。その意味でインシュラー発祥の地は、広島と欧州パリかなと思います。当時の広島県知事は、昭和28年離島振興法策定時に島の県で担当していた人です。離島に強い想いのある人でした。

1994年にはインシュラーとISISA：国際島嶼学会がバッテンィグを避けて共催となり、ここ沖縄で開催されました。

もともと国内の島の学会を立ち上げたいとずっと思っていました。それは、それぞれ専門分野での発表の場はあっても、島全体を取り扱うような学会はな

かったからなのです。ずっと働きかけてはいたのですが、広島でのシンポジウムでも何人かに働きかけました。太平洋学会顧問に大来佐三郎さんになってもらったのも、これが契機でした。ISISAに集まった日本人出席者に話をかけて、日本島嶼学会発足に向けての発起人会をやろうと署名活動を会場で始めました。そういう意味で、日本の島嶼学会と国際の島嶼学会の発祥の地はメルパルク沖縄です。その経緯もあり、あえてこういうタイトルを付けた次第です。

3-2：柳田国男的島嶼学：地元学の足場からの飛躍

島の学問それ自体は、いろいろな意味で各島が発祥の地であっていいのです。皆さんの手元に「奄美発、『島学』への期待」として、9月9日（金）から12日（月）に開催された「日本島嶼学会徳之島大会」に関して書いた記事をお渡ししています。柳田国男が『海南小記』とか『海上の道』とかで島について議論し研究する手法は、当時島をよく知っている地元の人から聞き取りながら彼らの成果をまとめ、さらにその上の議論をしていくという手順をとってきました。地元の知、島の知恵、知識の体系というのを足場にしながら構築しており、そういう意味で彼がやってきた方法というのは、ある種正統な地元学の積み上げの上に立った展開であり、いわゆる演繹的手法でモノを捉えていくのとは違う手法でした。共同研究・資料整理成果を受けての研究展開です。

椰子の実が流れついているところから南から来る文化に対する発想や思いが湧き、伊波普猷に出会い、島、特に沖縄の世界に入っていく。その後九学会連合調査で学際的共同研究が対馬・佐渡をはじめとする島や半島などを対象に展開されていく。後半の奄美調査あたりから、「人間生活を基本とする研究、学問的統合」という意識を持った総合的展開が始まる。奄美という地域がどのような意味の二重性構造を社会的構造として持っているかについても、展開し整理していくことになる。奄美はトカラも含めて、九学会連合調査を戦前と戦後の2回も行われる。それほど研究上面白い地域であった。そういう意味の島嶼学が、本格的に総合的な学術として、かつフィールド対象として注目され展開されるという歴史があります。特に奄美の場合、奄美そのものの古層と、琉球の影響と大和の影響、それらの重なりから地域をとらえないと、社会の仕組みや発展の方向性も見いだせない、そういう研究の対象。学際的にとらえることで大きな展望へと成果を向かえるような方向性が意識されます。

3-3：島嶼学：総合学術・学術統合の方法

島の現実をどう捉えるか、我々が学問をする上で島嶼学が成立するのかという問題も含めて、考えなければならない。その方法としての学際があります。島を捉える場合にそれぞれの専門のみで対象を扱えば、島嶼学というのは島嶼を対象にした諸学の寄せ集めでしかない。九学会連合も当初はその傾向がありつ

つも、互いに関連する領域だったことがよい展開を生んだようです。

専門的知見のみでも関係性や島嶼性に関する総合知見を意識することで見えることがある。島が抱えている問題の特徴というものを、隔絶・環海・狭小という条件として整理してみると、よく見えてくる。例えば経済学的に見た場合、それらは費用：コストとか交易：トレードとかに当然影響を与えるし、経済社会発展上のある種制約条件や逆の有利性にもなる。しかし、それだけでは島全体の話にはならない。基本的には小さな国:スモールステイトの経済学で済んでしまう。それもまたその地方版で済んでしまう。セミマクロのモデルに落とし込まれてしまい、そこで終わってしまう。行き場のないほどに単純に見えやすい世界で終わってしまい、現実との乖離感を与えてしまう。

一方先ほどの九学会連合調査のように、人間生活を基盤にして、それを受けて総合的に捉えていくことになると、それに見合った方法論というのが必要になってくる。近接の生活環境だけを捉えればそれで済むのかというと、それだと単なる生活学であり、生活環境学になってしまう。そこに地域性をも表す必然的な要素、地理学・地質学的要素、海洋とか空とか、そういう総合島エコロジーの要素をしっかり組み入れていく。

そこにエコロジー的な意味での島嶼性の発見も追加していく。島が抱えている特殊事情というもの組み見えるようにしていく。例えば種の多様性にも島嶼的特徴がある。多様性は少ない、固有種は多いという状況、かつ外来種に対して脆弱である。環境変化への対応を意識的にしていかないとそれは保持できないという問題。これは、ガラパゴス等遠隔孤島で典型的に見られるアイランドコンプレックスという現象です。

風なども、島を超えて吹きぬける。卓越するときに標高圧縮効果というのがある。屋久杉・佐渡杉の長寿・古木・原生林的存在もそのような条件で保持される。同じ標高でもより寒冷地性植生というのが残る。あるいは川が少ない、あっても短い。渓流魚などが海岸線までいる。それは島という制約があるから、動物の生活・生存・行動圏に制約を与えるわけです。

そういうようなことがそれぞれの学問分野で、島らしさの研究としてあるわけです。そういうものを集約しながら、お互いにそういった成果を利用応用しながら捉えていく。先ほどのアイランドコンプレックスという孤島状況下の特徴は、実は文化面でもあるわけです。固有文化や社会構造を保持していくためには、努力しないと保持できない。そのために“ユイ”があったり、社会保持のためにお互いが助け合うルールがあったり、伝統文化を守ったりする。そういうものが生活ルールとしてしっかりある。奄美・沖縄などはシマ社会という、水系を同一にする基本的生活単位での人々の成り立ちというのが社会の基層にある。その集合体としての島。そういう理解の上に立てば、島嶼性の理解の上に立つ社会原理も分かりやすく展開できてくるわけです。望ましくはその基本

の組み立ての総称が島嶼学として位置づいてくる。

その学際的展開を一人の人間が全部知り実践するのは、普通は非常に難しい。それぞれの専門を極めるだけでも大変なわけです。では、どうしたらいいのか。まず基本は本人が全ての分野の学問に通ずればいい。少なくともそれを目指す。それらの芽が出たところで、みんなで力を合わせてやっていく。島嶼学会という学会組織で、お互い異分野のことも聞きながらそういうことを学習し続けていくことが、学問を成立させていく要件になっていくだろうと思います。逆 T 字型に幅広く、そして専門は高くということをよくいわれる。一人の人間がやっても限界があるならば、それをみんなで、それぞれの研究をやりながら作っていく。そういうことで学際性の制約を超えていく。トランスディスプリに持ち込みながら、お互いが高みに向かいスパイラルを展開していくことによって島嶼学の体系化ができてくるであろうということです。

3-4：宮本常一的方法論 ― 比較論・現場学・記述学・総合知・自由な立場

分かりやすく入りやすい方法は比較島嶼論です。かの島と比べて、何がどう違うのか。いろんなものが見えてくる。宮本常一は島嶼学の父といってもいいぐらいのすばらしい方法論をとっている。彼は柳田国男（元農務省高官）と違って一人ですべてをした人です。とにかく日本の道ある道は全て歩いたといわれる旅すなわち現場学の達人です。京都大学教授に誘われても、大学に行ったら学問ができない、そんな暇があったら調査しろと渋沢敬三（大蔵大臣として離島財政施策にも関与した財閥出身者）からサポートを受けてアチックミュージアムで研究を続ける。彼のフィールド学というものはすごい。もともとフォークロアをしているのですが、彼の方法というのは地元で資料発掘しながら積み上げていく。道具とか営みの違いについて見聞を重ね、気づいたことについては改善点についてもアドバイスしていく。調査票を持っていって聞き取って、それで終わりというそんな方法はしない。その方法論を批判する。じっと生活・労働の現場に立ち、畑や路地で同じ目線で物事をみていき、そこから学ぶ。古文書、地元の文献をもう一度掘り返していく。じっくり時間をかけていく。墓場や神社仏閣や高地にも立ち、古文書も探り、空間や出自や歴史や成り立ちを探る。そういう地に足のついた方法で彼は実態を総合的につかまえて続けていきます。生活・産業・暮らし・文化・社会の現場学。だから島という現実を、「そのもの」として彼は受け止めながら進んでいく。

彼は山口県周防大島の東和町の出身。彼は小さい頃から瀬戸内の海を見ながら育ち、そして見ていた世界をずっとその後も研究し続けていく。そういう視点から、やがて他の島々や山間の地域等へいく。フォークロア:現地で資料発掘を続けながら新しい手法である写真にとったりする。ところが、戦争:大阪空襲で貴重な戦前写真が全部焼けた。無念を乗り越え、資料をどうやって残してい

くかという事をきちんとするようになる。移動困難な時代の写真というのは今でも貴重で昭和史の生き証人になっています。出身地東和町に郷土資料館があり、そこで専門の人が保存修復整理復刻作業をし続けている。専門家としての目線も違うのでそれほど貴重で質も高い。もっとすごいのは、彼のフィールドノート。現場で書いたものが、そのまま本になるぐらいのものです。専門家に監修してもらいながら郷土資料館で市販刊行し続けています。最初の復刻について送ってもらい、書評として島嶼学会誌に出すべく丹念に読み実に驚きました。彼はそういう正確な記録化について緊張感ある姿勢で調査をし続けていたのだと感服しました。調査から帰ったら、すぐにノートを読み直し、整理し、再確認をし、原稿に起こして書き続けていることが読み取れる。ですから著作集があれだけ膨大なものになるわけです。正確性についても折り紙つきで、彼はそういう記述学：きちんと記録して記述していく学問ができていた。それが現実に近い学問として、彼が展開できた方法であった。それから既存の方法論にあまり縛られなくてよかった。つまり、大学というアカデミズムの殿堂に無理して自分を置く必要がなかった。短兵急な結論も、依拠集団レファレンスグループに合わせ権威づけることも、その地位確保や学内行政のための労力も不要であった。地道に誠実に積み重ねる続けることが許された。芸能・戯曲・道具類にも強い関心と成果を残す。経済成長・近代化推進時代の中で急速に失われつつあるものの記録化は時代も必要ともした。方法論・研究対象・表現方法の自由度は、職業的立場の自由さも重い役割を発揮し、それらを可能にしていく。

最後は武蔵野美術大学の教授になるが、そういうすごい方法論を彼が展開できたのは彼の幸運でもあったし、後に続く我々にとっても幸運であった。私は大学に入る前から島の研究をするつもりで大学学部学科も選択したが、大学に入って最初に感動したのが宮本常一の本との出会でした。それから島の共通性がはっきりみえてきた。隔絶・環海・狭小等という視点からものを見るということで、経済学的にも応用できた。そういう方法論が彼の本からみえるのです。彼自身は島だけではなく他のところも調査しているからよく見えるのですが、彼がきっちり記録や資料を残してくれることによって、我々は間接的な経験ができるわけです。それは大変大事な定性的・認識的データベースになるわけです。（余談ながらおかげで、学部卒論文で全国規模学会誌に2本投稿でき、掲載もされた。中央官庁にも経済職甲種で奉職できた。以来宮本的研究を目指し続けていて奈良女にもスカウトしてもらった。）

3-5：離島学と島嶼学の基本的な違い

離島学というのは「孤立的」「遠隔的」に於かれた島の持っている特殊条件的不利性克服への拘りがある。いわゆる歴史、文化、社会が特殊（特に不利）な

状況下におかれてきた。それが離島化という現象を生むとみる。海上交通手段が主である時代は、むしろ島はそれぞれの地域を結ぶ拠点であり、線と線、あるいは面でつながっていた。むしろ情報・文化の経由地であり先進地であり、保存地であった。これを「島嶼時代」として論ずる状況とは好対照である。交通手段が鉄道とか自動車に変わり、陸の交通体系が主になり、重厚長大型の産業を主とする社会に移ってしまうと、島と島との連絡が切れて端っこになる。対岸の大きな都市や港としかつながらなくなる。隅っこになり、必然的に他のところよりも常に高いコストが必要になる。時間も情報も、いろいろな面で制約を受けるようになる。それが「離島化現象」とみる。社会状況が大きくかかわることで地域が変えられていく。離島振興法が 1953 年にできるが、宮本常一とか東京大学の島嶼学研究会:地理学・民俗学等の領域の人たちが中心となって手弁当で国会に働きかけて実現に向かう。島根、新潟、長崎、鹿児島等離島主要自治体が積極的に関わり、議員に働きかけ、日本最初の議員立法ができる。しかし第一条は何か。「本土より隔絶せる特殊事情よりくる後進性」を対象とし、それを「離島」の要件としている。佐渡という島生まれの人間としてこれほど悔しい規定はないわけです。島だから後進性というふうに決めつけてもらったら困る。予算のために蔑まれた規定に自縄自縛になっている姿が許容できなくなってくる。

しかし 1953 年当時は確かにそういう社会的状況にあった。道も港湾も悪い、どうしても予算も後まわしになってしまう。その頃の離島振興法の柱は、水と光の革命だった。光：電気です。島に電気が十分にない。それほどの格差があった。水は簡易水道、上水も下水も、灌漑用の水も、生活上の水も島内確保が制約的であった。ほんとにベーシックなヒューマンニーズへの対応です。そういうところからの改善だったわけです。そしてだんだんインフラとかソフトとかが入っていくわけです。そういうふうな、沖縄の言葉でいえば「しまちゃび」、離島苦というのがあった。予算制約改善については、昭和 33 年から中央官庁のお金を一括計上という方式で総括管理を行う、専門的役所を設けて、全予算を統合して計画的・総額的に一定額を確保し実施を確かにものにしていく。渋沢敬三がそれをした。

しかし我々が考えるのは、こういうインシュラリティ、いわゆる孤島性・隔絶島嶼性とか島が抱えている特殊条件のみを見るという視点ではなく、そこから別の視点に転換していく必要がある。多様な発展可能性と不利条件の克服・転換には「固定的離島認識」以外の「島の多様性認識」が不可欠である。隔絶というのは距離が離れている。離れていることは、大変なコストと時間と交通手段上制約を受けるが、現在の条件は、以前と大きく変わっている。情報インフラ・格差・費用も変わっている。交通手段も高速交通手段が充実してきて便利性が改善し、離れていることは、むしろ個性であったり憧れの地になったり

しうることになった。狭小性:小ささというのはディスアドバンテージであった。しかしスモール・イズ・ビューティフルの時代になり、小さいことこそむしろ可能性である、あるいはヒューマンスケールで人々の暮らしが成り立っていることが持つ豊かさと総合性がある。スローライフもスローフードもポジティブに評価される時代が来た。

またシマンチュというのは本来オールマイティなのです。農業も漁業も工芸もできる、いろんな技をもっている。知識も豊富だし、文芸系も諸々できる。トータルな人間性がそこに存在する。それは、都会人ではなかなか保持・実現できない。専門的・部分知的職場、生活の場と職場が離れ、日常的にも地域にかかわりにくい。自分のトータルな人間性や役割を発揮しにくい。それを評価してもらえる社会環境にもないのが都会生活。「隣は何をする人ぞ」と、人と人がつながらない。そういうところが島とは基本的に違う。一方島は小ささや空間性に影響される。環海性というのも、海に囲まれているということは、津波とか台風とかもあり、どうしても交通手段やアクセスが難しいということがある。昔は艀(はしけ)でしか行けなくて、だからその艀の労働力がなくなると、無人島化する臥蛇島のようなケースもあった。隠れキリシタンなども、一定の事情の下、積極的に離島に住み、そこからの海路逃亡先すら念頭にあった。そういう環海性というのは、むしろ「海とつながっている」わけです。海洋資源の広域管理拠点や海洋療法という利点もあります。最近は別の視点で、境界、特に領海やEEZ：排他的経済水域起点としての大切さが国策的にも柱として意識されるようになっている。小島・遠隔こそ特別に大事なエコロジー・文化があり地政学的にも重要という視座や認識も出てきた。エコロジー的貴重性と保存を要する特筆的価値の所在も認識され始めてきた。島を見る世界的視座は変わってきている。海底資源を含む環海性・拠点性はむしろ可能性であり、個性であり、有利性であるとする展開が可能である。そういうところを総合化していけば、インシュラリティ Insularity：隔絶孤立島嶼性ではなく、ニソロジーNissology：島嶼学という新しい立場にたちうるわけです。

3-6：島数の数え方

巡った島の数ですが 3000 島といっても、それは数え方です。隔絶・環海・狭小は相対化できるし、『広辞苑』で言う「四周を水によって囲繞されたる空間」も広い解釈ができる。普通島を数える場合は、「満潮時（高水位）に 1m 以上あって、周囲が 100m 以上あるもの」を「仮の基準」として数えています。その基準には必然性がなく、地図上で数えているにすぎなかった。もっと小さくても島なのです。そこに植生があれば島と数えるとすると、例えば長崎県の九十九島には本当は 240 程あるとか、きちんと見るとまた変わってくるわけであり、そこは数え方です。運河により囲まれたところも、もともと島だったり島にな

ったりです。島は人工島もあれば河川に囲まれたところもある。そのようにして数えると結構あるのです。だからあなたがたもこれを機会に明日からでも、アイランドコレクターになれます。よく私は庭園に行きます。庭園に行くと橋が架かった島があって、「ああ、今日は3つ稼いだ」とかやると楽しい。地図で見て架橋島とか運河とか庭園とかあると行ってみたくなる。無理してでも庭園を見にいく。島が別視点から相対化してよく見えてきます。多様性認識の基準になるわけです。そのようにして1971年10月から40年間、生まれ島以外の「島」を巡っています。大陸以外はすべて島世界。それが地球。そうするといつのまにか3000になっていました。面白い。野球で言えば、打率は落ちますがホームランは落ちません。イチローのヒットの数と一緒です。

3-7：島嶼学・学会 ― 現実に近づき展開する力

総合的に捉えるときに、BIGINの唄「島人ぬ宝」の概念にはインパクトがある。教科書で教えない世界は自分にはよくわかるという。島に行くとホッとする。島に行くと元気になって帰って来ることができる。私にとって空が広いということもある。奈良にいるとき、平城京というところが、ただっ広くて空も広い。私の佐渡島も857平方キロメートル、国仲平野がありまして、その海岸部で育ちました。内湾が広くて夏は静穏。サンゴ礁や瀬戸内や広い内湾、自分のもとの世界がそこにある。ホームと思える島の基準。教科書にない島の世界がそれぞれにある。島の人たちのアイデンティティの原点だと思います。しかし、学問的にそれらが全て捉えられるかというところが問われる。心の内まで入った島の研究というのも必要になってくる。人と心、精神ですね。人と人、人と自然、人とコト：ソフトの関係、ヒトとモノ：カネですね。こういったものをトータルに組み入れて見る。人とライフの関わりを総合的に捉えると足元：原点がよく見える。それは近接環境を総合化するという方法です。どれかがないと豊かではない。それぞれの要素が相互連関している。全体論的空間性というものを考えると、十分条件がしっかり見えてくる。また人間存在というのは何か。ライフから考える。ロングライフ：人生であり文化的・精神的存在である。日々の暮らしであり経済的社会的存在である。命という生理的・生殖的存在である。その全体存在を取り囲む十分条件的生活環境要素を総合化し、現実世界に近づく。相互作用的にマネジメントし、地域おこしではその向上を目指すベクトル：位階性を考える。

島のもっている可能性・潜在力もよく見えてくる。都会の空間はゆがんでいる。その世界がむしろ島ではどうであるのかも捉えられてくる。島はいろいろ無いことだらけです。それを数えたらきりがない。ないものを組み合わせ工夫しマネジメントをしながら、営みをしてきた実力が島にはある。「教科書にない世界」といわれるけれども、教科書もむしろそういうところを意識して作れる。

島嶼学もそれに近づけるかと思います。しかし、永遠に近づけないかもしれない。それはそれでいい。学問は学問の役割がある。そう開き直るしかない気もします。ただ反省点はある。今までの学問は偏りすぎていた。分析的に切り刻んでようやく学問としての真実が見えてくるという方法論。発表の手段がどうしても印刷媒体になってしまう。評価する集団がどうしても偏っている。地元の人を主人公にする展開が十分でなかったとかがありました。それを越えるための学会を意識しながら展開をすることによって、島の現実に寄り添った寄与ができてくるのだろうとも思っております。学会を立ち上げた時からそれを意識してきた。島人の批判に耐えられる学問、直接島人の前で発表する学会、一緒に互いに発表しあう場の設定などです。

3-8：島で島を島から学ぶ

島で学ぶ場合に、その人がどういう立場かで学び方も違ってく。島生まれ島育ちの BIGIN のような見方もある。ファースト・コンタクトがそもそも島であるから、島に対する愛着が全く違う。「島人ぬ宝」のまさに「シマンチュ」をどうみるか。100 パーセントのシマンチュもいる。戻ってきた U ターンとか近くに戻る J ターンもいる。全く違う都会あたりから来た I ターンもいる。最近言われている O ターン:始終頻繁にかかわり続ける人もある。それらの皆シマンチュ。島を抜きに自分の人生を語れない人はたくさんいる。我々研究者で島を研究する人間も、ある種のシマンチュ。それぞれの関与の仕方によって利害関係的：ステークホルダーに島とかかわる。そういう多様な人たちが、多次元的に、濃淡ありながら、総合的・部分的に関わりながら、島を作っている。それを意識していくことで、また足場の置き方が変わってくるし、当該者性の違い尊重が、いい関係をさらに生み出していく。人がどう関わりながら島を経営していくかという視点で考えると幅広で多様な可能性が出てくる。島で、島に足を置き近接環境性で、具体と自分を意識して環境の総合性と取り組みの方向性を組み入れることによって、島での営みの本質的なところに我々は近づいていけるでしょう。

島を学ぶ。そこでの島らしさとは何か、島とはどういう現象があるのが、島にはどういう発見があるのか。無論島だけではない普遍性にこだわった島対象の研究蓄積もほしい。これらを積み上げて、島だからこそある現象とか、島の特殊性とか法則性とか個性とかを深く多様に分かってきますと、島嶼学というものがまさに「学」として存在することを主張できてくる。いろんな発見を期待したい。琉球弧というのは琉球弧なりの特殊な部分がたくさんあります。特殊は普遍や個別との比較でより明確になる。それら研究にあたって、郷土史家や郷土学の大家の学問体系をきちんと尊重しながら、一緒に共同して研究していくことが大事になる。9 月徳之島で日本島嶼学会をした時に 17 名 19 件の地

元報告があった。それ自体学会としても大きな成果でありました。一緒に学べたというのは次につながると思うので、これからも続けていきたい。島の中でも、島をよく知る人の知の体系自体が、昔ほどではなくなりつつある。どう対策を講じるかは喫緊の課題です。島に行っても島のことが分かる資料がない。屋久島属島に口之永良部島：火山の島がある。時々噴火して人が亡くなることもある。しかし『上屋久町郷土誌』には全然書いてない。島について全部で 8 ページしか書いていない。どこにいったら資料があるのか苦しんでいましたが、鹿児島大学練習船でいくと、なんと小中学校の渡り廊下に口之永良部オオコウモリの剥製、農機具、漁具、発掘した考古学資料等が展示してある。地元の人の手書きで昔にガリ刷りしたような昔の歴史について書いたもの、本、新聞連載物のコピーなどがちゃんとケースに入っていた。嬉しくて、写真に撮っていたら、校長が「いいよ、コピーしてあげる」と協力してくれた。噴火時の事故とか事件とか、そういう事実はどこにもない。しかし現場にきちんとあった。地元のことが地元に行って学べる。特に小さな島はそれをしないと次につながらない。トカラ列島にいって、平島にいって知りたいと思っても、郷土資料館は中之島にしかない。それでは駄目です。それぞれの島の中にそれがあるような状況を作っていく。小さな島にそれぞれの歴史と文化と個性がある。それを島の人自身が蓄積できる状況を、協力して作らないといけない。島の人自身がもともと持っている知の体系をどう育んでいくのか。未来世代に自覚的にどう継承していくのか。その基盤整備と蓄積への助力を是非したい。その模範例が口之永良部にある。それができていない島にはエンパワーメント上の問題があるということです。

「島から学ぶ」は、現代社会が失いつつある何らかの原点の所在確認を島に見出したり、島にある良い面が鑑となって示せたり、他の地域に貢献できる可能性の発見などです。長寿子宝やユイマール、アイランとセラピーなどが例となります。他の島から学んでの島おこし再考も大切です。問われるのが応用力です。それを可能にするマニュアルとしての総合学・具体学での点検、補完方法などの骨格の提示も学会の役割です。

3-9：琉球弧：歴史的位置と内部境・多様性

日本列島の国家的統合や地域間の繋がり方を考えた、島嶼論的通史の中に琉球弧を捉えなおすと、今までと違って見えてくるものがある。最近考え始めている内容・問題意識について以下いささか大胆に言及してみたい。

琉球はいわゆる交易国家であるけれど、単なる中継地だったかどうか。琉球自体が生産物供給地としの重要であった部分が時にすっぽり抜けている。硫黄鳥島に行ってみると随分違って見えてくる。古来長期にわたり琉球の交易品で最も大事なものは硫黄だった。硫黄は、南宋の時代に国家統制の対象になった。

武器原料になるものを統制し北に対する国防にあたった。外国に原料を必死に求めていた。日本との交易再会で博多に行き硫黄を手に入れた。平清盛の時代以降南に目を向け、硫黄をきちんと確保する政策として琉球と深く関わりをもつようになる。硫黄を加工保存する場所が那覇港にもあった。泊は硫黄鳥島への拠点だった。硫黄採掘は王府直営。琉球王国が殖産興業的実力を持っていたということを、もっと意識して良いのではないか。また、古代の貝の道についても、金属が装飾品として登場する前の時代において、貝というのは非常に魅惑的マジックな存在で、その産地は北と繋がっていた。北九州の弥生クニ勢力がトレードをしきっていた。しかし弥生文化からはほぼ独立した空間性を沖縄島は保持していた。貝の道南限はどこだったのか。一方はるか次の時代の先島クスク遺跡を見ると貿易の主体になっていたのは、朝鮮系か大和系か地元でない勢力だった。その勢力を除去して琉球王国の統治が完結する。後の薩流 400年を考えても北と琉球の関係の歴史観は、東との関係の比でどのような強さだったかという研究はタブー視しない研究が必要と思われる。東との関係は利害的、南とは交易的、北とは緊張的、半島とは表敬的という仮説を持っている。アジアモンスーン島嶼論史観も組み入れると琉球島嶼史論は相当面白くなりそうな予感がしている。

琉球弧日本史論とヤマト日本史論そして北方日本史論が合体して本当の日本列島史が書ける。島嶼国日本論はその総合でなくてはならない。その時ヤポネシア論、これは島尾敏雄さんから始まっていますが、これも位置づけが改めて問われてくる。天皇制とか中央史観への対抗として、奄美から日本列島をみると日本史はもっと違ってみえてくるというものです。しかし、ただそれだけでは足りない。アンチテーゼとしてはいいのですが、琉球弧、あるいは奄美・沖縄:琉球王国自身が、日本史の中にどれだけの実質的な影響を残したのかという見方がそのヤポネシア論では捉えられない。幕末期は別として、もう少し全体の日本列島の中の多様性としての位置づけていく視点が必要と思います。経済史とか社会史とか言語の問題とか、多様性を考える場合に、そこが起点になってくる。違いのある社会が、どうつながり、どう展開してきたかという総合的な歴史で日本列島そのものの歴史の捉え方が変わってくる。もう少し別のやり方をもってきた島嶼全体史に期待したい。

例えば境界という視座で歴史を見ても面白い。トカラ列島が奄美と政策的に文化線を引かれたか歴史もある。火山列島的日本列島という線上で捉えながら、トカラや硫黄鳥島が持っている歴史的・自然的・社会的条件でみる。その中に珊瑚や火山活動を終えた古い層がある。列島内の多様性とその中における琉球弧とその中の多様性が相対化して捉えられると思っている。東アジアとの関係では対東と対北とでは違う。北特に朝鮮半島とのつながりは冬風・夏風・黒潮、そして漂流です。しかし偶発ではない。徳之島のカムイ焼の朝鮮起源と交易圏、

喜界島の大宰府との関係等は、奄美の琉球弧内の特異性を示している。

地形的要素で、生態学的にもトカラ海峡までの琉球弧はかつて大陸につながっていた。しかしそこに境が生まれ、後のエコロジー的な境にもなる。また、海底の地層・地形によって典型的に火山の列というのがあって、桜島からはじめて竹島、硫黄島、口之永良部島、そして中之島、これらみな硫黄が採れるところです。そのずっと上の延長線の中に硫黄鳥島がある。この火山列が持っている意味をどう考えるか。その東側の列は安定していて大きな島でつながっている。さらにその東側の列:喜界島は今でも隆起を続けている島で、また違う列になる。琉球弧の多様性は実はこういう線の上にある多様性でもある。またところどころ完全に切れている。琉球弧の中でも先島の位置は特別な位置になる。その上に生態的な動植物の境界が存在する。そしてその上に文化と歴史がある。言語的にもそうですが、中部文化圏、南部文化圏、北部文化圏の境の基本ベースが地形にもある。その上で古代はどう動いたか、弥生文化伝播はどこまでとか、縄文文化と何故つながらなかったのか、最近発掘成果も踏まえたダイナミックで興味深い歴史も琉球弧の中にはある。奄美言語発音表記がハングルだとほぼカバー出るという点も面白い。

赤色土器文化人が、突然沖縄からいなくなりどこにいったのかという先史時代ミステリーについて、最近形質人類学的に面白い関連事実の裏付けが出始めている。胃の中にいる特殊な毒性のある菌：ピロリ菌の分析で、ミクロネシアへの移動が裏付けられようとしている。細胞のミトコンドリアを分析でも、言語年代学で人の移動や分岐を推定してきたものが、ほぼ確証的な立証されつつある。非常に面白い。貝の道とか、言語・方言とかのつながりも、今後多様に展望が開かれてくるかもしれない。期待したい。

よく万葉語が沖縄に残っているという表現をする。そうではない。万葉時代の言葉、発音の共通の基層のある部分が残っている。あたかも平城京・奈良の中央文化が奄美にまで伝わり残っているという発想を導いてはいけない。歴史の見方をもっと変えないといけない。当時の社会を見ないといけない。朝鮮半島もウラル＝アルタイ語族。朝鮮半島を経由した共通の文法と発音を持った、大きなつながりの中の多様性としてとらえる必要がある。万葉語についての中央があってそこから来たという発想ではない。かつて南島経路で遣唐使が中国に行った時に、あえて奄美人を通訳としてつけた。つまりその当時はお互いが理解できない外国語だった。つまり大和からみたら、奄美が異界だったわけですね。つまり方言ではなく言語が違うという扱いだった。

古代の共分母的共通基盤と、遠隔的多様性、そして次なる交流混交的多様性で見ていくと列島文化史も面白い展開に進めそうである。

古琉球の話も本当の意味で統一国家ができるのは、先島が併合されるときで、形式的併合と実質的併合まで結構時間があったということもおさえておく必要

のある話です。実質的併合時に、南方系の芸能とか文化とかが、中央・宗教文化論理で抹殺され禁止の憂き目にあう。それが秘儀的にあるいは形を変えて先島に残る。琉球全体も今度は明治時代に、皇国論理で方言や文化統制を受ける。奄美が薩摩の植民になり、文化固定・差異化強制をされる。島の多様性の外圧的抹殺現象は、島で起こる社会現象でもある。これもアイランドコンプレックス=「外圧支配」の変形です。

それで面白いのは、先島の南方系芸能と、トカラ・鹿児島の仮面・踊り・芸能とのつながり。八重山や宮古とつながるのは黒潮。それが沖縄本島・奄美群島をバイパスして直接結んでいる。列島中の多様性と黒潮。

飲酒の文化にもつながりがある。宮古島のオトーリが、なぜヨロン献奉と類似するか。宮古島石垣職人夫婦を王府が派遣し、伝わったとする仮説もある。

トカラ列島臥蛇島当たりが、クニサカイだったと朝鮮国書に書かれてもいる。1460年に漂着した朝鮮人を、2人琉球から2人薩摩から返した。あえてそういう形でクニザカイを示したという政治力学もあったらしい。

トカラの島々と奄美とは薩摩戦略で政策的に文化境を設けられた。1698年に奄美の人は髪型・言葉・姓名も一文字になどと、大和・薩摩との違いを強制した。文化境を設けることにより、明との交易で薩摩が支配関係を隠そうとした。トカラを偽装国家的にし、宝（トカラ）島の人を使って公式交易をしようとしてすぐに見抜かれた史実がある。奄美についてもそれをする。琉球についても中国は見抜いていても、都合よく中国は関係を保持する。

交易境を作られただけではなくて、文化的境を政策的に設けたことは大事なところです。その後奄美の文化が大和とは異なるものとしてどう残されていくかにも影響を与えていく。“薩琉400年”がついこの前ありましたが、薩摩後も沖縄が政治的に特殊な位置に立たされてきた歴史があるが、琉球弧にどのような線を引かれ、その周辺とどう関わってきたかにかかわる問題になります。薩摩の沖縄侵攻時に徳之島の65キロ西側の硫黄鳥島が、なぜ琉球のままであったかについては特別な意味がある。明との交易を失わないためで、明も硫黄確保の実利があり背に腹を変えられない。

そのクニザカイも、米軍統治下・琉球政府下ではいったん消える。奄美・沖縄は一帯だった。交易もあれば人事交流もあった。奄美出身の教諭が硫黄鳥島にもいた。もっとも硫黄鳥島に結構徳之島方言もあった。けっこう昔から人が行き来していたとも思われる。琉球弧の中の多様性とつながりも、特異部分についてすら本来的な近接性が影響しているとも言える。境があっても人のつながりとか文化の流れという意味では、近くの場所との関係がある。

移住・開拓の流れで、南北大東島の沖縄・八丈島文化混交も有名事例としてある。

琉球弧中の線引きで意外に知られていないのが、徳之島と与路島の線。ここ

は昔同一者が統治していた。古謡にも残っている。今一つが徳之島・沖永良部間の線。祖国復帰運動が燃え上がっているとき、この返還分離線案がスクープされた。薩琉400年以降県境は違うが、もともと文化・言葉・珊瑚社会境としても指摘されていた。徳之島・与論、特に沖永良部では、強烈な運動が展開されることになる。ここに線が引こうとした真因は、実は軍事的な理由があった。米軍レーダー・情報基地があったからである。しかし文化境が認識されており、沖永良部・与論が、取り残され固定化で返還が長期化し遅れることを恐れた。早く帰りたいとして強烈な運動をしていく。

隅っこの小さい島々は、トカゲのしっぽ切り的に、政策的意図で偶発的に引き裂かれかねない危険性がある。世界中事例があるが、先島も分島されそうな時期があった。国益優先で地方無視であった。島が持っている自然境界的連続性や民族的連続性も絶対的ではない。外部の世界から強制されて作られる境界性ゆえの緊張関係に立たされたりする。そういう場所性がある。そのことを、我々は意識していく必要がありますし、中央の論理と地方・地域の論理というのは衝突の場となる。陸でもあるが島における線引きは見えやすい。

現三島村三島・上屋久島町口之永良部・現十(と)島村七島（臥蛇島を入れると有人八島）は連続小型島嶼群で、口之永良部を除くと一つの村でした。七島の米軍支配からの返還が遅れたために、三島側役場を鹿児島に十(じゅう)島村として、中之島にあった十(じゅう)島村役場を名瀬に分けて置くしかなかった。昭和27年に返ってきますと、二つの村役場を鹿児島に置かざるをえなくなる。住民投票で村が分かれて今なお鹿児島に島外役場があり続けている。因みに11月3日に復帰60周年をする。本当は2月10日です。そして島ではなく鹿児島に皆集まってする。外の論理で島社会の在り方が変えられてしまった典型例です。

3-10：琉球弧と外部世界

島と外の世界を考える場合に、政治的な関係の前に、海流と風がある。実際にライター流してみると、黒潮北上ルートの逆方向が、季節により出現する。朝鮮半島西部からまっすぐ本島まで来る道がある。北風で流れてくる。このルートで遭難もあれば、琉球王府と李朝朝鮮との公式な政府間交流の展開もあったと。先述のカムイ焼きも徳之島で作られるが技術は朝鮮系。奄美方言もハングル表記できる発音として残っている。奈良時代の中央方言ではない。そういう共通性は外との連続性として、意識しておくといいのではないか。

琉球王国と耽羅国=済州島とは元独立島嶼国としての類似性がある。潜水技術でもつながっている。韓国海女=潜女:ヘニョンの世界屈指の高度技術・隆盛の背景に、糸満ウミンチュ開発のミーカガン（ゴーグル）がある。これが革命的にヤマト海女経済進出に対抗し、これにウエットスーツが加わり、生産性向上と病気克服に役立ち、彼女らの半島・沿海州・ヤマトへの本格進出を実現して

いく。

無論ヤマト・薩摩とのつながりは先ほどの南北季節航路を使っている。薩摩半島山川港には琉球王府役人の居住地があり今も史跡としてたどれる。甑島にも琉球墓がある。

奄美の隣喜界島では太宰府との強い直接関係を示す遺物群が近年発見された。平家の落人説も、三島・十島・加計呂麻島にあり、俊寛伝説は三島硫黄島と喜界島にもある。源為朝伝説はさらに南まで来ている。いつだれがどのように拡大解釈をし、都合の良い方向に思いを広げたかについても興味がある。

「万国津梁」でいうと、中国は当然拠点を置き公式に先進文化・政治的経済的利益を取り入れる関係先ですが、東南アジアとのつながりもある。インドネシアジャワまでも含め大型船交易史も資料的に記録されている。琉球弧が過去において果たしてきた役割として重要な橋=南の方への広がりは、日本列島交易史の南向け拠点の確認にもなる。列島内多様性としての東南アジア島嶼域・沿岸域との国際交流とか、国際的・経済的なつながりの見直しは、過去的でありつつも未来的でもある。今もますます近く世界の発展拠点なので、琉球弧とくに沖縄の果たすべき役割はますます大きい。

琉球王国の統治方式は、ヤマトの統治方式に先行しかつ影響を与えている。国家統一も先行し、刀狩り、検地は琉球からはじまっている。貿易立国でも先行し、先進中国から技術・文化・イモも積極的に導入した。早くから国営鉱山を持ち、政教一致で国政を安定化し、ノロを各地隅々にまで派遣した。御主加那志(ウシュガナシ)と聞得大君(きこえおおきみ)の統治体系、すなわち男子の政治のまつりごとと、女子の宗教のまつりごとを重ねながら統治した方式には安定性があった。ソフト行政とハード行政と両軸両方は、国家の形成・統一・統合の強固さを裏付けた。文化的なアイデンティティの形成、琉球王国の持っている個性・安定性の源泉として、改めてしっかり捉えておく必要がある。この男性原理・女性原理の組み込みは、家庭内の女性の家族の安全無事を祈る役割的認識として日常界においても基層的に継承されている。余談ながら西南の役で政府軍の弱さを実感した山形有朋が皇国意識を高める戦略を打ち出すが、この西欧列強から学んだ統治原理は、琉球政治と類似といえなくもない。皇室も皇后ほかの女性役割的公務を組み入れていく。

開国前夜外交に果たした琉球役割は日本列島の中でも特出している。長崎と並び幕府の(薩摩仲介)情報拠点であり、社会実験的開国前先例を数々展開する。ジョン万次郎の劇ポスターを以前那覇で見たが、まさにあの時代の歴史ドラマが琉球にはある。

3-11：琉球弧とオセアニア

オセアニアとの関係は、先史時代からあり、先述のミトコンドリアやピロリ菌で立証された民族大移動の一部は琉球弧経路ともされる。
島嶼部移民ではハワイ大量移民のほか南洋群島・ニューカレドニア移民も有名です。関係は相当に深い。特にミクロネシアとの関係 100 年が間もなく来る。文化的・歴史的・風土的にも沖縄と近い。どういう関係を作っていくのかというときに、南洋群島時代の総括が非常に大事になる。

南洋群島移民分布は一般資料から時々抜ける。それほど短期間の変動が大きい。先に入った砂糖産業のリーダーは福島とか山形とか東北の人達で、技術的先進性と勤勉そして地味がまだ収奪状態ではなかった。砂糖特需と海軍支援が強烈であった。これらがその隆盛を生んだ。沖縄からは終戦直前短期間大量にサトウキビ労働者として、特に北マリアナに入った。現地人をも上回る数に達したが、テニアン・サイパンの悲劇はそこで生まれる。後半に入ったことと結末の悲劇とで、苦い歴史がここに残った。慰霊団の方もたくさん入るが、関係構築的構図は他地域とは少し異なる。

非常に貢献したのが漁業関係です。特に鰹節生産。硫黄鳥島火山避難者の末裔は、久米島鳥島集落から鰹節生産者としてミクロネシア各地に拠点を作ります。糸満漁師も追い込み漁と棒受網餌漁や燻製も伝えます。ポーンペイ離島モキールにいくと、沖縄の人（個人名が複数でる）から教えてもらった魚の燻製が今も人口 200 人ほどの小島経済を支えている。人気品で首都スーパーに常時ある。高校もないのに高学歴の島で、今も行政高官・医師・教官を輩出し続けている。

沖縄の人は、シマンチュとシマンチュのつながりを作るのが上手です。海外漁業協力財団の評価プロジェクトで各地を回った時にも驚きました。トラック環礁ではベイト：餌漁が上手で現地の人も満足げに仲良く働いていた。ソロモン諸島でも基幹産業・最大の政府財源産業にまで発展していた。景気の良い時にはソロモンから直行便で下地空港に連れてきた。伊良部佐良浜ウミンチュが伝えた方言交じり日本語は有名で今も語り草になっている。本当に仲良くなって、一緒に汗を流して働いてくれる。島の人時間で、せっかちでない関係でつながってくれる。そういう沖縄のシマンチュのもっている実力をもう一回見直してみるのも大事だと思います。

日本島嶼学会前徳之島では 3 名のニューカレドニア報告があった。徳之島出身女性がフランスで学位をとりニューカレドニアで高校の先生をしていて、郷土愛で発表に帰ってきた。琉球新報前副社長の三木（みき）健さんは、沖縄ニューカレドニア友好協会の会長をしていて「ニューカレドニアと沖縄移民 — 交流の歴史とアイデンティティ」とする報告をした。1905 人 378 人を皮切りに、100 年前 1911 年までにニッケル鉱山契約労働者 821 人が渡航。5 年契約後帰国せず現地結婚し残った人もいた。1914 年欧州大戦で契約移民から自由移民となるが、

1941 年大戦で逮捕・強制収容で豪州に。1992 年には日本人移民 100 年祭を開催。2006 年写真展を契機に 38 人が来沖、沖縄友好協会ができ交流が深まる。2011 年ウチナンチュー大会では約 50 人が参加した。屈折した苦悩と経験ではあったがそれだけに、深みのある国際交流が展開している事例である。

福建省とのつながり県国際交流資料では特記されていますが、なんといってもハワイは柱です。沖縄県出身移民の中で今も滞在者が多い。ご存知カリユシ・ウエアは、ユカタ⇒アロハ⇒カリユシの J ターン。観光産業、文化的・経済的にも深いつながりだが、亜熱帯・熱帯技術革新センターとしての沖縄との協働も始まっている。

3-12：琉球弧島嶼エコロジーと琉球弧島嶼エコノミー

最近は地政学の視点から島を捉える論点も強化されています。無論学問を総合的に捉えるというのは、国際的な政治とか経済も含むが、エコロジーから見直していくということが中でも大切です。自然科学的な知見がしっかり捉えられていることが島の持続可能性や島の本来的存在性強化のためにも不可欠である。古典的に捉えてきた島嶼学の柱は地理学と民俗学が基本にある。人の暮らしの骨格の上に立ったエコロジーが次に大切になる。エコロジーは相互作用系であり総合化しないと見えてこない。かつ地域毎の島的個性の類似性をどう統合化して組み入れていくのか。文化生態系でも同じことが言えるアイランドコンプレンス・バイオダイバシティの議論は典型的ですが、そういう法則性を組み入れながら捉えていく。離島が持っているインシュラリティというのは、もっと別の面でいくとアイランドセラピーという利点や島が持っている潜在力的豊かさや可能性という内在性見直しの方向性にも繋げられてくる。

住民主義・主権性の展開も不可欠である。シマンチュを主人公的に捉えながら、地域の経営のあり方を考えていくという地域主義展開をするというのが、島嶼学の島世界から求められている本来的課題・方向性だと思います。地域振興に貢献できるような考え方をしていく。しかし学問は地域振興そのものではない。そこに関わる基本的な有益な情報を多様な主体と共有しながら島の人と歩んでいくということが必要になる。内発性や共治：コガバナビリティがキーワードで、有利性発見を大事にしよう、見直す力を持とう、制約条件があればそれ取り除く。それができるエンパワーメントをしていくということが次の展開につながる。Em-Power-Ment とは文字通り権限獲得・能力開発・社会的実現環境付与・制約除去で、離島振興法の本来的基本理念となるべきものである。

経済学的には、MIRAB エコノミーというのがあります。隔絶・環海・狭小の典事例が太平洋のど真ん中にある。資源がない、同じものしか産品がない、規模もない、コストも高い。すると Migration 移民、Remittance 送金、Aid 援助、Bureaucracy（政治力学的）官僚経済しか道がない。これが小さな島国の特徴

になり続けている。人口が少ないから、大国がZoo Theory的に囲い込んで、小さな金額で、大きな権益を確保できる。アメリカとミクロネシアの関係で指摘されている姿がそこにある。

沖縄経済もその類似性を云々されてきた時代がないではない。労働力流失・失業、門中・親族的サポート、中央・国家資金流入、Base基地収入依存であった。外への依存はいつまでも続けられないとみられていた。そのための産業をどう作っていくのかが問われてきた。しかし現在相当変わってきた。Tourism観光の量と質が国内構造と違った力をつけてきた。国内離島は冬と春秋激減する。沖縄は通年でサービス産業的効率が良いかつ伸びている。エコ・グリーン・ブルー観光も本格化してきた。ガイドやインストラクターもそれで食っていける。土産や地域産品個性もセンスアップで全国区化した。漁業も農業も今のところ好調である。しかし農業では補助行政で支えられている面があり国際競争力的弱点がないわけではない。亜熱帯農業のイノベーションな部分への期待は強い。ハワイとかグアムとかと連携し展開しながら、世界に発信していく。他の途上国にもいい影響を与えるイノベーション展開こそ未来可能性である。

玉野井芳郎さんがしたような、広域経済に立って物事をみる、コモンズエコノミーに立って物事みると、島社会の経済が生存経済論的にもとらえられてくる。珊瑚礁の抱える地域の経済的特徴や人々の営みが持っている可能性や、そこにおける防災的な配慮なども見えてくる。ミクロネシアと沖縄：琉球弧と本土：ヤマト域経済との違いも見えてくる。まさに人間の経済で見ていく。Exchange交換論だけではないTradeやり取りも見てくる。内地島嶼のような自力更生型厳しさではない優しさが育む社会がそこにある。社会の持っている琉球の持つ人々の営みの力と基礎を見つめることで、デミオオルギー的地域・家族・親族的に抱え込みのポジィティブ側面も見えてくる。地域のもっている育てる力が長寿・子宝的な基盤にもなっている。そういったところも捉えられてくる。Redistribution再分配社会構造、Reciprocity互酬的豊かさの源泉も暮らしの原理的違いとしてとらえられてくる。相互扶助体系が本質的に豊かで、門中的なつながり・郷友会的なつながり・シマ社会的構図の社会基盤の上に立った助け合いの社会的遺伝子の現在も捉えられてくる。現実・日常性に近づいた琉球弧生活世界島嶼学がそこにある。そういう学問が期待され展開されていくだろうと思います。

市場の経済以外というより以上の経済は対人的資源・人的資源があり、そして自然の豊かさがある。本来第1層親なる自然経済、第2層社会的対抗経済、第3層政府・市場経済が三角層かパウンドケーキ層をなしているのですが、物質文明時代には、逆三角形的に下が減りに上が増え卓越化しつつある。その本来的自然と人の営みの豊かさを基盤にした地域づくりをもう一回していく。島から新しい文明の再提起もできるだろう。長嶋も含む玉野井グループの共通認

識です。

1980-83年玉野井さんグローブはシマおこし運動・シンポジウムを沖縄島嶼・本島で繰り返します。地場産品開発・見直しと地域アイデンティティ形成が目的です。地元の人達を主人公・報告者として具体問題について、グローカル提唱者清成忠男・後で県副知事を務める尚弘子そして全国各地地域おこし実践成功者・研究者とで討論し、暮らし・営み・生産の原点からの「めくりかえし」をしていきます。宮古・石垣で行動を共にしましたが、多良間島に黒糖生産が残ったのもこの動きによるものでした。黒砂糖の本物性・健康性vs.白砂糖の偽物性・不健康性、宮古上布の正当性vs.和装の正装性、モズク生産vs.下水処理問題等、現在の非常識・当時の常識が真剣に議論されたのです。これら実践活動も琉球弧島嶼学発祥地の理由の一つです。この広い視座には報告者も強い影響を受けました。

先ほどの人・人関係：ヒューマンウェアとか、ソフトウェア・エコロジカルウェア・精神的ウェア・ハードウェアを組み合わせながら、ない部分があればそれを補いスパイラル的に向上していくという、十分条件的地域改善の発想もこの延長線上の認識です。環境管理もエネルギー=質量保存則、エントロピー則、エコロジー循環則で方法論を最終チェックしながら展開していく。小さな地域ほどそれらがよく見える。不都合はすぐ改善に向かえる。その苦しさもよく見える。具体の場で実践マニュアルも示せると思っているわけです。それが島=地域からの提案力になる。島嶼防災学もそうです。リスクマネジメント・リスクコントロールに島嶼事情を組み入れる。島嶼地域自然リスクと総合知・経験知・扶助体系、復興復旧プロセスとライフの質向上優先順位=複合位階性展開。島の地形・地質・地層特性や火山・地震・津波・病気・異常気象・人災等のリスク対策史等は、島嶼防災学実践に組み込み可能なものです。琉球弧防災学も成り立つと思っています。

五感的六感的な豊かさ、まさにBIGIN的な世界をもう一回取り入れながら関係性をみていく。第六産業も組み入れてみる。隔絶・環海・狭小からもたらされる離島苦を克服するためにも、自らが動いていける状況を模索し、周辺条件制約があれば社会的に取り除いていく。それは不可能ではない。例えばデンマーク。島に高校がないのは、行政の都合で無いのだから、社会が責任をとり、島外生活費の3分の2はみる。年20回島に帰るフェリー代も出す。まさに社会の仕組みによる補いでエンパワーメント実現に向かう。本当の島嶼・離島振興のために、構造的対応を実現していく。そういう主張こそ未来を開いていく。琉球弧振興・沖縄振興にも共通していえることだろうと思います。

琉球弧をどう列島として捉えていくのか。異質と比較する。共通性と歴史からも学ぶ。相対化しながら、地域個性を見つめていく。エコロジーや亜熱帯性や東西南北ももう一度見直してみる。先週いた五島列島などは、朝鮮との関係

性・歴史性も強いつながりがあるのですが、日常意識では切れている。しかし観光的潜在力も、EEZ顕在的問題も本来振興のカギである。琉球弧にも同じ日常化見直し点が多数あるはずです。100年規模豪雨基準が毎年のこととして頻発しはじめている。1000年に一度の災害が実はもっと頻度が高い可能性であったりする。奄美祖国復帰運動での泉芳朗詩が普天間基地徳之島移設問題で復活した。島民の魂。稲作伝播の「海上の道」仮説も遺伝子的に違うことがわかっても、柳田・伊波や九学会型島嶼論はしっかり継承されるべき本質がある。何度も温故知新を重ねながら、琉球弧個性と可能性を見直してみる。先島・ウチナー・奄美・トカラ・大東の歴史・文化・経済・自然は互いに繋がり合いかつ個性的である。多島域的に規模確保や補い合いながら、広域的に可能性を広げてみる。列島的問題解決としては、鹿児島の島々での、じゃがいも出荷時期調整事例があります。意図的にずらすことで、価格保持・産地化とともに全国展開のポテトチップス工場誘致もできました。五島は西に離れていることを活用し北海道とでカリフラワー産地化に成功しました。世界的企業とで椿油やマグロ養殖産地化も進んでいます。トカラも奄美とのつながり強化での地域振興模索を始めました。地域の連続性活用は潜在力でもあります。境界解除も新戦略になります。沖縄と鹿児島とでぜひ琉球弧開発論を展開していければと思います。このプロジェクトの未来可能性に期待します。